
けいおん！ ヘタレ活動記

リザルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ヘタレ活動記

【Nコード】

N7797R

【作者名】

リザルド

【あらすじ】

けいおん！の二次創作です。共学になった桜ヶ丘高校にオリ主（男）が入学し、軽音部の皆と出会い、一緒に音楽をやっていきます。恋愛物を書く予定で、ヒロインは唯です。キャラ愛だけで書けるかと、勢いで書きました。題名はよくわかりません。何か最終話まで書かないと全体像が見えてこない気がして…

第一話 始まりは突然に（前書き）

小説を書くのは初めてです。文中にはおかしな表現や、変な改行などが目立つかもしれません。また、誤字や脱字もあるかもしれません。その際は是非とも報告してください。それではどうぞ。

第一話 始まりは突然に

ん…ここはどこだ？あれ？教室？

周りを見渡すが、誰もいない。どうやら自分一人のようだ。

ふと気がつくくと、窓から茜色の鮮やかな光が射し込んでいた。こんなところで俺は一体何を…？

何となくドアの方に目をやる。

何かの予感がする。それが何なのかを考えようとすると、頭にモヤモヤと霧がかかっているような感じがして思い出せない。何だ？どうなってる？

そんなことを考えていると、ドアをノックする音が聞こえた。わざわざノックなんてしなくてもいいんじゃないか？にしても音大きすぎるんだけど…

ドンドンッ！

「優人ー！」

ドアを叩く鈍い音と、母さんのこもった声が聞こえる。

うるさいなあ…俺はまだ眠いんだよ…

「優人、あんたそろそろ起きたほうがいいんじゃないの？」

え？どういう意味だ？ていうか何で母さんが俺を起こしに来てるんだ？いつもは目覚ましをセットしてるのに…

…って、あー！そうだ！今日は入学式だった！今何時だ？

時計を見てみると、短い針は8、長い針は4を指していた。

嘘、やっぱ…！

俺は蒲団から跳びだし、大急ぎで着替え始めた。

朝飯を食ってる暇はない！テーブルの上の味噌汁には目もくれず、

俺は右足から家を跳びだした。

はあっはあっ…あーもう、こんな風に全力疾走したのいつぶりだよ！…うっ…頭に血が昇ってきた…やば、足の感覚が無くなってきた…

くそ。日頃から運動してなかったせいかな。

そんなことを考えながら走っていたから、俺は曲がり角に差し掛かっても気づけなかったんだ。角の向こうからも人が走ってきていることに。

「！」

「はうっ！」

「うわっ！」

ドンッ！！

「いてててて…」

「いたたたた〜」

やばい、人とぶつかってしまった！あ、あーとつとつと、とにかく謝らないと！「ごめんなさい！！急いでたもので…あ、あのう！お、お怪我は…？」

ああ、やばいやばいやばい…も、もし怪我でもしてたら…

「い、いえ、大丈夫です！」

「そ、そうですか！よかったです…」

その言葉を聞けば普通は安心するのだが、背中でのその声を聞いていた俺は焦った。

え？お、女の子！？う、嘘！

恥ずかしながら、俺はまだ15歳で、実は女の子とまともに話したことはほとんどない。それどころか、女の子の目を見ることがさえためらってしまうレベルだ。

だってしょうがない！？女の子だよ女の子！

やば、ただでさえ走ったせいで顔が赤くなってるのに、女の子だなんて…うう、自分でもわかるほど真っ赤だ…

「そちらもお怪我は　　ってあれ？その制服は　　君も桜が丘の人なの？」

「ええっ！？」

変なことを考えていたせいで、素っ頓狂な声をあげてしまった。いかんいかん。落ち着こう。

「あ、まあ、そうっス…」蚊が鳴くような声で呟く。恥ずかし！
「あー、やっぱり！ねえねえ、もしかして君も新入生？」

「あ、はい、そうっス…」「も」と言うからにはこの人も桜が丘高校の新入生なんだろう。

ていうかさっきから同じような返答しかできてない。何やってんだよ俺は！うう、は、恥ずかしい…な、何かないかな…あっそうだ！

「あ、あの！こ、このままじゃ遅刻…」

「おお、そうだった！ねえねえ、一緒に学校まで行こうよ！」
「っ！」

ええっ！そ、そんな！！ああ言えば一人で勝手に行ってくれと思つたのに…でもそんなこと言ったら変に思われるよね絶対。ああ、どうしよう…いや、ダメだ。そんなんじゃダメダメ。せ、せっかく向こうが厚意で言ってくれてるんだから、無下に断っちゃだめだ！
「そうっスね！い、急ぎましよう！」

緊張で舌が回らなくて、「そうですね」と言えない。バカかよ…

ああ、やばい。い、息が、あがつてきた…この口は疲れないのかな…ふと隣の女の子の顔を盗み見する。　　そんなの無理無理無理無理！向こうが気づいて「何？」とか聞いてきて、俺が何も言えなかつたら、「え？何？人の顔じろじろ見るとか気持ち悪いんだけど」とか思われるに決まってる！

「着いたあ　！！！」

女の子がいきなり大声をあげ、ビクツとしてしまう。あれ？もう着いたの？何か頭の中真っ白のまま走ってたから、滅茶苦茶早く感じただけだ。

そ、それにしても疲れたあ…全然大した距離じゃないはずなのに…受験勉強のせいかな？

と、そんなことより時間は間に合ったのか！？

俺は校舎の上の方を見上げた。

あれ？8時4分？え？全然遅刻じゃないじゃん…え？え？
どういうコトなのコレ？何で？だって出かけたのが8時25分だっ
たじゃん……

「全然遅刻じゃない…」

俺は独り言で言ったつもりだったが、女の子には聞こえていたよ
うだ。

「え？どういう　　えー！！？何でえー！？」

！ま、まさか！俺は思い当たる節があった。昨日のことだ。

その夜、俺は明日の入学式に向けて、期待と不安の混じった複雑な
気持ちを抱えていて、何だか落ち着かず、明日着ていく制服を手に
取って眺めたりしていた。明日のことを考えているうちに、目覚ま
しのこと考えが至った。

俺はそれまで目覚まし時計を持ってはいたが、高校生活にかける意
気込みから、気分を新たなものにするための一環として、目覚まし
時計を変えようとしたのである。

そこで、俺は隣の部屋の押し入れを探すことにした。そんなに苦勞
することもなく、目的の物はあっさり見つかった。傷が多く、もし
かして使えないんじゃないかと思っただが、深くは気にしなかった。

でも、今よく考えてみると、それが間違いだった。明らかにあの目
覚まし時計のせいだ。なんか傷入ってたし。考えが甘かったな、う
ん。反省モノだな。

あれ？でもじゃあ何でこのコは急いでたんだ？

「あはは〜時間間違えちゃったよ〜」

俺の心の声に答えるかのように女の子が言った。あ、実は

「あ、実は俺もなんです。目覚まし時計がぶっ壊れて
て…」

言い終わってから後悔した。何俺普通に話しかけちゃってんの！？
「あははは！」

何故か笑われた。何で！？わけがわからなかったので、俺はその娘の方を見上げた。見上げてしまった。

「私たち、何だか一緒だね！」

天使のような笑顔が、そこにはあった。

「あ…う…」

俺の発した声は、言葉にならなかった。

何も考えられない。吸い込まれるように、俺はその笑顔に魅せられていた。

た。

桜の花びらが一片、目の前を掠め

(私たち何だか一緒だね)

頭の中で彼女の言葉がリピートされる。俺はあまりの衝撃に身動き一つできなかつた。

「どうしたの？顔真っ赤だよ？」

彼女がひょいっと身を乗りだし、つぶらな瞳が俺を見つめる。息がかかりそうな距離で。

もう無理！！

俺は全速力で逃げ出していた。ごめんなさい！

「あ、ちよっと！」

後ろで彼女の声が聞こえる。でも仕方ない。だってもう無理！！

はあっ、はあっ…はあっ、はあっ…や、やばい、ちよ、心臓の鼓動がハンパない…朝からずっと走ってきて、それで今でもう…ああ、頭までクラクラしてきた…お腹減ったなあ…あ…なんかいいしきが…もうろうとしてき…ま…し…た…

バタン！

第二話 保健室で（前書き）

何かグダグタで長ったらしくて読みにくい小説になってる気がします。というか改行の仕方が未だによくわかりません。読みにくいかもしれませんが、楽しんでいただければ幸いです。

内容は、題名の通りです。それではどうぞ。

第二話 保健室で

目を覚ますと、知らない天井が見えた。俺はベッドで寝ていたようだ。

辺りを見回すと、白いカーテンで周りは仕切られていた。すると、ここは保健室か。

いつの間にこんなところに運ばれたんだ？いや、それより誰が俺をここまで運んだんだ？そもそも何故俺は保健室に運ばれたんだ？

そこまで考えて、先刻のことを思い出し、頭を抱えてしまった。

カッコ悪すぎる…女の子から逃げ出して、その疲労で倒れてしまうなんて。朝から遅刻寸前（大きな勘違い）で全速力で走ったせいでもあるんだろうけど。入学式の日から保健室の厄介になるなんて、前途が多難すぎる。

…それにしても静か

だ。誰かいないのかな。

カーテンから頭を出すか、誰もいない。ベッドから起き上がって部屋を見て回るが、やはり誰もいない。

ふと見ると、窓の外では桜が舞っている。

また寝る気にもなれないので、俺は窓から身を乗りだし、外の景色を見た。

少しづつ、だが絶え間なく桜の花は散っていた。

そういえば、あの女の子と話していた時も桜の花が散っていた気がする。さっきの女の子にはかなり悪いことをした。どうやって誤解を解いたらいいのかな。

いや、その前に謝るべきだ。話しかけているのに、いきなり逃げ出されたら、わけがわからず混乱するだろう。彼女に会ったら謝らなければならぬ。

いや、その必要はないのかもしれない。だってもう会うことはないだろうから。でも、もしかしたら同じクラスになるかもしれない。

そうだったら、彼女は確実に俺が逃げ出した理由を聞いてくるだろう。その時に何も言えなかったら、彼女は俺に嫌われたと思うだろう。それはまずい！それは何とか回避しなければ。

しかし、何と返事すればいい？「とても美人のあなたがその綺麗な瞳で近距離で僕を見つめて、恥ずかしくなったからです。」とありのまま言えばいいのか？

いや、あり得ない。それが冗談として通じる人もいるかもしれないが、残念ながら俺はそういう類の人間ではない。むしろ俺は引っ込み思案で、中学生の頃もクラスの中で目立たない存在だった。となると、別の言い訳をつくるか。

寒くてすぐに校舎内に入りたかったから？いや、不自然だろう。ていうか別に寒くないし。

一刻も早くクラスの振り分けを見たかったから？いや、いきなり走って見に行くほど急ぐことでもないだろう。

何かないか、会話をいきなり中断させてまで遂行しなければならぬ急用。

：

ダメだ。思いつかない。でも、どうしても考えなければいけない。だって、とてもいい人に見えた。でも、それよりも、

「可愛かった…」

ホントに可愛かった。戸惑っている俺に笑いかけてきたあの娘。その時の、天使のような笑顔がどうにも頭から離れない。滅茶苦茶可愛かった。うん、ホントに可愛かった。あの顔を思い出すと、胸のあたりが何かキュツと絞めつけられる感じがする。ホントに何か切ない。

俺はその事実に対し動揺した。

もしも同じクラスになって教室に入った時、すんなり話せれば、その後は仲良くなれるのかな。

…やっぱり同じクラスがいい。何か誤解とか簡単に解けそうな気がした。

ていうか、そもそもそんなの気にしないかもしれない。そんな風に見えたから。

…これが一目惚れってやつか。ダメだこれ。あの娘のことばっか考えてしまう。今頃あの娘は何してんのかな…

そんなことを熱心に考えていると、突然後ろから声が聞こえた。

「気がついたみたいね」

驚いて振り向くと、白衣を来た女の人が立っていた。歳は30代後半位に見える。何か太ってて、おばさんっぽい。

「ええ、まあ…」

と、はつきりしない応答をする。不意を突かれてちよつとびっくりしたのさ。

「気分はどう？何か悪い所はないかしら？」

「あ、いや、その、気分っていうか、実は…」

お腹が減ってるんです、と言おうしたちよつどその時、腹の虫が鳴った。何てグッドな(?)なタイミング。「もしかして朝御飯食べ来てないの？」

「急いで来たものでして」そうだ。今さら思い出したが、俺は朝からずつと何も食べてない。うう…考えたら余計に腹が減ってきた。

「まさかそれが原因で倒れてたの？」

「いや、まあそれもあると思うんですけど…」

何て言おうか。

「走り過ぎですね、多分」「走り過ぎ？」

「時間を間違えて遅刻だと勘違いしたから、朝からろくに朝飯も食べないで、ずつとここまで走ってきたんです」

「ああ、それなら倒れても無理ないわね。まずは…そうね、私が食べようと思ってたけど、これを…ええと、君の名前はなんだったかしら？」

「あ、新垣優人です」

「そ。じゃあこれは新垣君にあげる」

そう言っって先生が渡してきたのは、白いビニール袋だった。中を見

てみると、コンビニで売ってある、ちよつと大きめの弁当箱があり、箸がそれにゴムでくくりつけられていた。

「え、これってまさか…先生の昼御飯じゃないんですか？」

「ええ、そうよ」

当然のように言う。

「そんな、悪いですよ。先生の昼御飯はどうなるんですか？」

「いーのいーの、生徒がそんな心配しなくて。何、私はこの学食でも食べるから」

「はあ、それじゃあ遠慮なく…」

蓋を開け、まずは俺の好物である卵焼きを口の中に放り込む。ちよつと甘すぎる気がする。

「さてと」

先生は立ち上がり、向こうの椅子に座った。机で仕事をするのだから。

俺は弁当の残りを平らげることにした。

急いで食べたから、正直味は覚えていない。でも十分お腹いっぱいになった。

ご飯を食べ終わったところで、気になることがあった。「あの」

「ん？何かしら？」

「俺をここまで運んだのって誰ですか？」

「ああ、親切な子が一人いたのよ。その子があなたを見つけてあなたをここまで運んだの」

胸が高鳴る。まさかと思う。

「それって女子ですか？」「いや、男子よ」

期待はあっさり打ち砕かれた。

「あ、そうですか…」

ほつと胸を撫で下ろす。ほつとしたような、がっかりしたような、複雑な気分だ。あ、別にこの男の子は伏線でも何でもないから気に

しないでね。

「あ、それじゃあもう一つ聞いていいですか？」

「どうぞ」

「今って多分入学式ですよな？」

「いや、今9時20分だから…そうね、今ごろそれぞれのクラスで自己紹介でもしてる頃じゃないかしら」 「！！！」

何だって！人間は第一印象が大事なのに…自己紹介すら行かなかつたら絶対礼儀知らずとか思われるよ！ ああ…失敗した…これからどんな顔して教室に行けばいいんだ…

俺が俯いていると、先生が声をかけてきた。

「そんなに落ち込むことないと思うけど……………第一印象とかそういうの気にするタイプ？」

「いや、そういうわけじゃないんですけど…」

そういうわけなんですけどね。

「まあ新しく高校生になったばかりだから不安なのもわかるけどね。事情を話せば済む話じゃないかしら？」

「そうですね…」

「ところで、体調の方はもう大丈夫かしら？」

「あ、はい。何かさつき倒れたのが嘘だったっていう位快調ですね」

「そ。じゃ、その調子で頑張ってきなさいな」

「ふえ？」

「今からなら間に合うんじゃないかしら？自己紹介」「今からですか！？そんな無茶な…」

そんなことしたら、俺のエアクラッシュヤースキルがいかんなく発揮されてしまう。それはダメ。うん、その選択肢はない。

「え…？そんなに嫌なの？」

やばい。不審がられてる。「いや、そういうわけじゃないんですけど…」

「…まあ、不安なのはわかるって言ったけど、これは仕方ないんじゃないかしら…」

先生の言う通りだ。逃げてたつてどうにもならない。それに俺は

「そうですよね。行つたつて死ぬわけじゃないし。軽い感じで行けばいいんですよ」

先生は少し驚いたような、困つたような顔をした後言った。

「ええ、まあ、そうね。が、頑張つてきなさいな」「はい！」

俺は大きな声で返事した。「それじゃ、失礼します」「お大事にね」
バタン！

扉を閉めた後、先生が何か呟いたような気がした。「そんなに意気込むようなことかしら……」

第三話 再会、そして決意（前書き）

どうしても上手く内容をまとめきれなくて、ぐだぐだになってしま
います。読みにくいかもしれないですが、ご容赦ください。

具体的な内容は、主人公が軽音部入部を決意するまでです。
なのですが、唯の性格が変わってるような気がします…

小説を書くのって、難しいものです。

と、こんなことを話してもしょうがないですね。

それではどうぞ。

第三話 再会、そして決意

保健室を出て、俺が毎日通うこととなる教室に向かう。

って、俺の教室はどこにあるんだ？えっと確か昇降口に書いてたはずだ。よし、行くな。

昇降口まで行くと、あっさり自分の名前を確認できた。

「1年3組か…」

どうでもいいかもしれないけど、俺は今の今までクラスで3組になったことはない。うん、ホントにどうでもいいね。

…それにしても静かだ。まあ生徒が廊下を歩いてないから当たり前だろうけど。えーと1年3組はと………お、あったあった。

やべ、緊張してきた。何かさっき別の教室でも自己紹介の真っ最中で、誰かが思いっきり笑われていた。ああはなりたくない切実に願う。

そんなことを考えているうちに、とうとう教室に着いてしまった。残念ながら死角はない。立ち止まっていたら不審に思われるだけだ。ここは覚悟を決めるか。すうーっと大きく息を吸い、扉を開ける。

「あ、あの！」

皆の顔が一斉にこっちを向く。一人、席を立っている男子がいた。うわ、皆こっちガン見してるし…

「あら、君は…？」

声のした方に目をやると、とても綺麗な女の人がいた。こんな綺麗な人が担任なの！？やべ、顔が熱くなってきた！

「あ、そのさつきまで保健室で…」

「ああ、君が新垣君ね。　って大丈夫！？顔真っ赤よ！？」

「あ、いや、その、」

恥ずかしくて言葉がまともに紡げない。やばい。

「多分、ここまで急いで来たからだと思います…」
などと言って、思い出したように息を切らす。

「そ、そう。気分が悪かったらいつでも休んでいいのよ？」

「あ、いや、多分大丈夫です…」

「そう。話は聞いてるわ。えーと、そうね、とりあえずあの席に座ってください」

そう言われて、先生の指差した方を見る。

一番右の列で、前から二番目で、廊下側だった。

前にいるのは……女の子か。いや、隣でないなら大丈夫だ。

隣は……よかった。男子だった。

後ろは……うん、男子だ。少し安心した俺は自分の席に座った。

「はい、それでは続けましょうか」

「はい」

返事をした男子が自己紹介を再開した。そうか、自己紹介の続きか。
って俺も自己紹介するんだった。やばい。何も考えてない。他の人が言ってるのを参考にしよう。

一旦出席番号が最後の人まで回って、最後に俺の番が来た。発言中は頭が真っ白だったので、正直何を言ったのかあんまり覚えてない。でも無難な紹介をしたはずだ。

趣味はあるにはあったが、適当に、のんびりすること、とか言ったような気がする。言うのが恥ずかしかったのさ。

自己紹介が終わって今は何をしているのかというと、先生の話を聞いている。何か授業のこととか、正直どうでもいい話をしている。俺は頼杖を若干つきながら、前の娘の髪サラサラで綺麗だなあ、とか、先生やっぱ美人だなあ、とか思ってる内に、やっぱ女子が多くて当然だよな、とかいうことを考え出した。

実は俺が今いるこの桜が丘高校は、去年まで女子校だったのである。何で急に共学になったかという、何でも少子化対策の一環だとか。

「ギャルゲーかよ」とかそういう突っ込みが思い浮かんだ俺の脳みそは、大分やられていいるのかもしれない。

去年まで女子校だったのだから、当然女子の人数が多い。さっき見た時も、三分の二程度は女子がこのクラスを占めていたように思う。女性恐怖症の俺なのだが、なぜこの高校を選んだのというと、話せば長くなるので割愛する。

ということを考えている内に、チャイムが鳴った。先生も話が途中だったようだが、一旦話を止めてこう言った。

「それじゃあ今日はこれで終わります。ええと号令は…私がします。起立！」 「礼！」

「ありがとうございます！」

俺は頭を下げるだけにし、そのまま机に突っ伏した。が、さすがにずっとそうしていても不自然なので、帰ろうと席を立とうとしたところで上の方から声が聞こえた。

「ねえねえ」

可愛らしい声だった。女の子かよ!? いや、待て、この声は…

俺は反射的に顔を上げた。「君…じゃなくて、新垣君。さっきはどうしていきなり逃げちゃったの？」

突然のことに頭がついていけない。えっ? ていうかさっきの娘? うっそ!? まだあの言い訳考えてないし! ?

えっ? えっ? ど、どうしよう! ?

パニック状態の俺の耳に、助け船が出された。

「トイレ行かない?」

女の子が話しかけているのが聞こえた。これだ!

「あ、その実はトイレが我慢できなくて…」

「トイレ?」

「何か急に腹痛くなっちゃって…」

「そうだったんだ。あ、そういうえば先生も言ってたか」

「へ?」

「先生がね、新垣君は体調不良で今保健室にいるって言ってたんだ

よ

「あ、そうだったんすか…ていうかごめんなさい！いきなり逃げ出したりしちゃって」

「やっ」と謝れた。

「ええ！？いいよ、そんなの。体調が悪いなら仕方ないよ」

「いや、でも何か悪いツス。ホントにごめんなさい、マジでごめんなさい！」

「…」

彼女は無表情な目でこっちを見ている。

え？まさか地雷踏んじゃった？

俺の顔から一気に熱が引いた。

「ぷっ…ぷぷぷぷ…」

あれ？何か笑ってる？

「ぷぷっ、あははははは！」

「ええ！？」

何故か大笑いされてしまった。

「会った時から思ってたんだけどさあ、新垣君ってホントに面白いよね」

「え？えっ？」

「そんなに必死に謝らなくてもいいんだよ？」

笑いを抑えた声で言うってくる。笑われたから勘に触ったのか、何故か俺の口はこんなことを言っていた。「そ、それは君が…」

何言いつしちやってんの！「違うよ！君じゃないよ、私は平沢唯っていうんだよ」

何か別のところを突っ込まれた。

「へ？あ、はい？」

「唯…！何してるの？」俺がたじたじになっていたところで、ドアの方から声が聞こえた。

「あ、和ちゃん！ごめんね、私もう行かなきゃ。じゃあね、新垣君！」

「あ…」

俺は間の抜けた声をあげることしかできず、呆然としながらその背中を見送るしかなかった。いつの間にか顔から熱は引いていたが、何故か胸の鼓動はうるさいほどに鳴っていた。

家に帰った俺は、二階に上がって自分の部屋のドアを開けると、そのままベッドに滑り込んだ。枕に顔を埋めながら、学校でのことを振り返り、俺はため息が出た。

元女子高と言ったって、中学時代は女子と一緒にいたのだから、そんなに苦労することはないだろう、なんて高をくくっていたが、初日からこれだ。俺はどれだけ女の子が苦手なんだろう。

いや、苦手というより、単に女の子とあんまり接する機会がなかったのか。

いや、俺じゃなくなたって、あんなに女子が多かったら混乱するか。俺も中学時代は、女子と事務的なことは話したことがあっても、雑談となると、さっぱりだった。俺は大人しい性格だったから（今もそうだけど）、こっちから女子に話しかけるなんて無理だった。だから、向こうから話しかけてくるのを密かに、ほんのちょびつだけ期待してたりなんかもした。

女子が苦手と言ったって、女子が嫌いなわけじゃない。できれば仲良くなりたい、と思っていた人も中学時代にはいた。

が、その人とは事務的な会話をするだけに留まった。向こうから会話を振ってくるなんてことはなかった。なぜだろう…

嫌なことを考え始めた俺は、洗面所に行き、鏡を覗き込んだ。

自分で言うのもなんだが、そんなに悪いとは思わない。しかし、いいわけでもない。

それとも俺の感性がおかしいのか。

いや、何を考えているんだ俺は。こんなの自分の努力でとうにかな

るもんじゃないだろ。

チツ、と舌打ちをしてから、再び部屋に戻った俺は、再びベッドに身を投げ出した。

思い浮かんでくるのは平沢さんの顔。見る者全ての顔を綻ばせるような無邪気な笑顔。触ったら柔らかかそうな茶色の髪。あの時からずっと、頭に焼き付いて離れない。帰る時もずっと、平沢さんのことを考えていた。

これは恋なのか。それとも女性恐怖症で、単に女の子と話すだけで緊張してしまうから、それを恋と勘違いしているのか。

わからない。よくわからない。

だけど気になる。あの娘のことが。明日も当然会うことになる。その時は

「唯……」

やりきれなくなっただけで決心した時に現れた顔も、笑顔だった。

いきなり話は飛んで入学式から約二週間。この桜ヶ丘高校の生活にも大分慣れてきた。

というのは語弊がある。慣れたと言うより、落ち着いたと言ったほうが正しいかもしれない。

落ち着いたと言っても女の子達と自然に話せるようになったわけではない。

平沢さんとは、席が離れていたこともあり、全く話さなくなった。

つまり、接点すらなくなっていたのだ。友達ができたわけでもない。隣近所には男子達が座っていたが、こちらから話しかけることはない。やはり事務的な会話をするだけに留まる。

そういうわけで、特に楽しみにするわけでもなく登校した俺は、今日も今日とて机に頬杖をついて、窓の外の観察（廊下側だが）に勤しむことにした。

そんなある日のこと。

その日の昼休み、俺がいつものように机に座ってポーツとしていると、遠くで驚きの声があがった。

「え！？まだ決めてなかったの！？もう学校始まって二週間経ってるわよ！？」教室が静かだったから、その声はこっちまでよく聞こえた。ああ、あの声は確か真鍋さんだ。平沢さんと仲がよかつたわけ。

「……」
平沢さんの声が聞こえるが、何て言ってるかわからない。

「……」
真鍋さんが何か言ってる。ため息をついてたようだけど……

「ええ！？部活やってないだけで二ート！？」

今度は平沢さんの声はつきり聞こえた。何やら不穏な単語が聞こえたぞ。ところで二ートって何の略称なんだろう……

いや、注目すべきはそこじゃないだろう。

部活か……

はあ、とため息をつきながら俺は身体を起こし、机の中から一枚の紙を取り出した。

このところ俺を悩ましている厄介な代物だ。向こうも同じことで悩んでいるらしい。

部活ねえ……

再びその単語を呟くと、俺はまだ白紙のその紙をじっと眺めた。

入る部活はまだ決めてない。運動は昔から大の苦手だったから、運動系の部活は論外。

文化系の部活も、面白そうなものはあまりない。

が、文化系で、一つだけ興味がある部活がある。

軽音部だ。

俺は中学の頃にギターを始めた。やってみるととても楽しかったから、受験勉強そっちのけでギターを弾くほど夢中になった。教則本も、何冊か買った。

でも、人にその腕前を見せたことがない。というか見せる人がいな

い。弾く時はいつも一人だった。

でも、いつも思っていた。俺もいつかはバンドを組んで皆と一緒に楽しく音楽をやっていったらいい、大勢の観客がいる前で自分の好きなように思いつきギターを弾きたい、と。

でも、所詮それは夢だ。だって、俺のギターの腕で果たして皆に認めてもらえるのかわからない。それよりなにより、こんな内気な性格で、皆と上手くやっていけるのか。俺がその関係を崩す要因になるかもしれない。

でも、と最近思う。高校生にもなって、何もせず終わるのか。このチャンス逃したら、もう次はないんじゃないか。それに、俺は決めたはずだ。もう逃げない、と。
なら…

でもやっぱり怖い。というか、部員が俺以外全員女子だったらどうなるんだろう。ハーレム？

いや、そんなわけない。俺だけアウェイになるだろう。気まずさがハンパない。

…はあ。やっぱり決められない。自分のこんな性格がいやになる。

俺は本日何度目かわからないため息をつく、入部届を机の中に入れ、机に突っ伏した。

そんな感じですっとうだうだしているうちに、4月も残り一週間となくなってしまった。別に、4月中しか部活は入部できないと校則で決まってるわけじゃないが、そんなことを言っていたら、自分はいままでこのままだと思う。だから、あと一週間で結論を出さなければいけない。本当に決めないと…

その日、俺は寄り道をすることにした。何となく、とあるCDショップに入ることにした。そこは俺が好きなアーティストのCDを買

う時にはよく行く店だった。

特に何か買いたいCDがあったわけじゃない。だが何となく、理由はわからないが何となく、その店に行くことにした。

が、俺の足はその入り口をまたぐことなく、入り口の前で止まっていた。店頭のテレビの映像に目を奪われていたからだ。テレビでは、あるバンドのライブ映像が流れていた。

俺はそのバンドを知っていた。メンバーは、記憶が確かなら、もう40代を過ぎていたはずだ。

俺はそのバンドが大好きだった。何しろ初めて本気で好きになれたバンドだったから。

そして、今ライブで演奏されている曲は、俺がそのバンドを好きになるきっかけとなった曲だった。この曲は、コマーシャルで流れていた。

なぜ好きになったかわからない。

でも、何故か俺はその曲に惹かれ、この店でそのCDを買った。

そこからは止まらなかった。結局そのバンドのアルバムは全部買ってしまった。今でも部屋に綺麗に整理してある。

だが、俺はある時期を経て、そのバンドが好きでなくなってしまった。いや、正確には今のそのバンドに対する興味が失せてしまった。彼らの作る曲に、何となく刺というものが無くなってしまった気がしたのだ。昔は社会を風刺するような、強いメッセージ性を秘めた曲を作っていたが、今は一辺倒なラブソングばかり歌うようになってしまったような気がした。

だから最近あまり聞かないようになっていた。

でも、今、彼らがあの歌を演奏している。ヴォーカルが歌っている。楽しそうに。

俺の情熱は未熟なのか。明日に保証はないのか。

俺はその時、運命的なものを感じていた。一世一代の決心をしよう

かと考えているちょうどこの時に、このバンドのこの曲を聞いたことに。

この情熱は本物だ。明日もきつと大丈夫だ。それを信じることはあっても、疑いはしない。足がすくんだって、助走は続ける。まだ見たことない皆と一緒に、昨日を越えるために。

ハイになった俺は、来た道を走って戻って行った。

第四話 予想外の色々（前書き）

毎回思うのですが、タイトルをつけるのって難しいです。その話の内容を端的にまとめたものでなければなりません。

で、今回も悩んだ挙げ句これです。意味不明ですね。今回は全て唯視点です。

と言ってもアニメの第1話をなぞっただけです。しかも都合のいいところだけ微妙に付け足ししています。

まあ、そんな感じですが、よろしくお願いします。

それではどうぞ。

第四話 予想外の色々

「うん」

私は今、ポカポカ陽気の中、鉛筆を、回したり鼻の上に乗せたりして遊んでいる。机の上の紙とにらめっこしながら。

「何唸ってるの、唯」

この聞き慣れた声は和ちゃんだ。

「あ、和ちゃん…実はどの部活入ろうか迷ってて…」 「え！？まだ決めてなかったの！？もう学校始まって二週間経ってるよ！？」

私がそう言つと、教室中に聞こえそうな声で言われた。その和ちゃんが怖くて、たじたじになっちゃう。

「でもでも、私運動音痴だし、文化系のクラブもよくわからないし

…」

「はあ…こうやって二トが出来上がっていくのね…」

「部活やってないだけで二ト！？」

とても恐ろしいことを言われた。

「振り返ってみると、唯って今まで何の部活もやってこなかったわね」

確かに和ちゃんの言う通り。私は今まで何の部活にも入ってこなかった。

何かしなくちゃいけないような気はするんだけど…

でも一体何をしたらいいんだろう…？

「あ、ところで唯、先生に呼ばれてたでしょ？行かなくていいの？」

「へ？」

「へ？って…次の音楽の授業で配るプリントがあるから職員室まで取りに来て、って先生言つてたじゃない」

「ああーそうだった！すっかり忘れてたよ！ありがと、和ちゃん」

「こんなんで大丈夫かしら…」

「グサツ」

えーっと、職員室は……どこだったけ？

あ、そうだ、あの人に聞いてみよう！

「ねえねえ、職員室ってどこか知ってる？」

「え？あ、あっちのほうだと思えますけど」

あ、確かに「職員室」って表札がある。

「あっちだね、ありがとう！」

「失礼します」

挨拶をして中に入ったんだけど、さわ子先生がいない。どこかな…
あ、いたいた！あれ、でも向こうを向いて誰かと話してる。

「そういうわけで、軽音楽部は廃部寸前なの」

「そんなあ〜」

さわ子先生がそう言うと、カチューシャをつけた人ががっくりした。

「せ〜んせえ〜」

「ごめんね、次音楽の授業だから」

私が呼ぶと、さわ子先生はさっきまで話してた二人に何か言ってるこっちに来た。

あれ、あのカチューシャの人がこっち見てる。気のせいかな？

「それじゃあ平沢さん、これを音楽室まで運んでくれるかしら？」

うわあ、あの人のおでこ広いなあ。何だか活発そう。「あの、プリント…」

「あ、ほい！失礼しやした」

何だか変な口調になってしまった。

うわ、このプリント重い！こんなの持っていけるかなあ…

ふとさっきの人の方を見る。あ、こっち見てる！やっぱり気のせいじゃなかったんだ。こっちもあの人の顔を見つめる。

「ああ？」

睨まれた!?

あう…怖くて足が震えるよ…

バサッ

あー!?!プリント落としちゃった!拾わなきゃ。

「ああ、ごめんなさい!急いで拾います」

「いや、いいのよ気にしなくて」

ゴンッ

「あふっ!?!」

いったい!起き上がる時に机に頭ぶつけちゃった。あ、それより早く拾わないと……

よし、これで全部拾い終わった。

「それじゃあ行きましょうか」

さわ子先生に言われて、出口へ向かう。

その時にちらつとさっきの人の方を見た。

あれ、さっきは気づかなかったけど、もう一人いたんだ。うわ、すごい。あの綺麗な髪腰まで伸びてる。あ、でもあんまり見すぎたらまた睨まれちゃうからこの位にしなきゃ。

「先生、さっき言ってた『けいおんがくぶ』って何ですか?」

「『軽』い『音楽』って書いて『軽音楽』って言うのよ」

「へえ」

軽い音楽か。どんなことをするんだろう。口笛とか吹いたりするのかな。

軽音部っていうのがあったんだけど、正直よくわからなかった。軽音部以外にも部活はいっぱいあるし、やっぱり決められない。

私何をしたらいいんだろう…何もしないまま大人になるのかな…

もうすっかり遅くなって太陽が沈みかけている中、私はそんなこと

を考えながら、和ちゃんと一緒に帰り道を歩いていた。

「はあ……」

「唯？」

私がぼんやりしていると、和ちゃんが聞いてきた。

「せっかく高校に入ったんだもん。何かしたいよね」「うん。すれ
ば？」

私は結構真面目に考えてたんだけど、ぶっきらぼうにそんなことを
言われた。

「……でも何したらいいかわっかんないんだよぉ〜！」たまらなくな
って、私は和ちゃんに抱きついた。

「ふう……やれやれ……」

結局その日も部活は決められなかった。早く決めないと……

そんなことがあってから一週間。まだ部活を決められなかった私は、
昼休みに校庭の掲示板を見に行った。この時期だから、部活の勧誘
のポスターばかりだった。

あれ？前に行った時はなかったのに、軽音部のポスターが貼ってあ
る。

「軽い音楽かあ……」

やっぱり口笛とか吹くのかな。それともカスタネットとかかな。

そういえば、幼稚園の頃はカスタネット叩いてたなあ。確か、先生
に「唯ちゃん上手ね」って誉められたんだっけ。

軽音部でもカスタネット叩いたりするのかな。うわあ、楽しそう！
「よしっ！」

決めました！私、平沢唯は軽音部に入ります！

「とりあえず、軽音学部ってところに入ってみました！」

「へえ、で、どんなことするの？」

「さあ？」

「えっ？」

「でも『軽』い『音楽』って書くからきつと簡単なことしかやらないよ」

「何、そのやる気のないクラブ……」

そう、私はとうとう軽音部に入った。あの後すぐに入部届を書いてさわ子先生に出しちゃった。

「何かバンドとかやるそうよ。唯大丈夫なの？」

バンド？バンドってギターとか、ベースとか、ドラムとかの？

「え？私ギターとか弾けないよ？」

「じゃあ何なら弾けるの？」

「うーん……」

私が弾ける楽器って何だろう。あ、やっぱりあれしかないや。

「か、カスタネット……とか？」

「……すごく似合うわ」

どういう意味だろう？

「でもギターが弾けなかったらまずいんじゃないかしら」

「え？どして？」

「ポスターに書いてあったのよ。『ギタリスト募集中』って。見えないの？」

えー！？そんなの全然見えなかったよ。ていうか何で和ちゃんがそんなこと知ってるの！？

「……見てなかったのね。まあ、ギターじゃなくてもベースとか弾けるならよかったかもしれないけど、カスタネットはさすがに使わないんじゃないかしら……」

そんなあ……私カスタネット位しかできないのに……

「残念だけど、やっぱり辞めます、って言いに行っただほうがいいと思っつわよ」

「ええー！？そんなの無理だよ……お願い和ちゃん！！一緒にいついてきて！」

「駄目よそんなの。私忙しいし」

「そんなつれないこと言わないでよお！」

その後いくら頼んでも、和ちゃんは来てくれなかった。

結局その日の放課後、入部の取消を一人で言いに行くことにした。部室は音楽室を使ってるらしくて、音楽室は一度行ったことがあるから場所は知ってるんだけど、やっぱり怖い。というかそこに着く前から怖い。

UFO研究会とかオカルト研究会とかホラー研究会とか、何か聞いただけで危なそうな部活（？）が途中でいっぱいある。ここを通り抜けないと、音楽室まで行けない……

「!？」

後ろを振り返る。何だか誰かに見られてる気がしたんだけど……気のせいかな？「……」

もう一度振り返る。やっぱり誰もいない。

本当に気のせいかなあ？何でこんなに気になるんだろう……

あ、わかった！怖くなってるから、視線を感じるんだ。じゃあさっさと行っちゃおう。

「ここかあ……」

あつと言つ間に部室にたどり着いてしまった。

のはいいんだけど、やっぱり怖い。

でも言わなきゃ。入ったばかりで言いにくいけど、やっぱり辞めるところ。

でも軽音部ってどんな人がいるのかな……

頭の中に、顔色が真っ白で、髪が金髪で、ものすごい格好をした人がもわもわ出てきた。

「アあん？辞めたいだと？貴様、タダで辞められると思ってるのか！？SATSUMAGAIスルゾ！！」
ひいひいひい！殺されちゃうの！？私軽音部辞めるだけで殺されちゃうの！？

私があまりの恐怖に足をガクガクさせていると、後ろから肩にそつと手を置かれた。

「ひいええええ！？」

「ん？」

「いいやちがいますちがちがちがちがつ」

私辞めたりしませんからああ！SATSUMAGAIしないでください！

「あ…あの時のドジっ娘…」

「へ？」

その眩きで私は我に帰った。見ると、この前のカチューシャを着けた人がこつちを目を細めながら見てる。「び、びっくりしたあ…」私つてば、一人で変な勘違いしちゃってた。

「何であいつが……………あ、まさか！」

「へ？」

「あなたが平沢唯さん！？」

カチューシャさんは、いきなり明るい声で聞いてきた。

「え？あ、はい」

「入部希望の！？」

「は、ハイッ！？」

その勢いに乗せられて、『はい』って言っちゃった。「ギターがすごく上手いんだよね？待ってたんだよあ！」
な、何かあらぬ尾ひれがついてるよ…

カチューシャさんは、嬉しそうに私の手をブンブン振り回してる。

どうしよう…とつても言いづらい…

カチューシャさんは私の手を握ったまま、音楽室の扉を勢いよく開けた。

「みーんなー！入部希望者が来たぞー！！」

部室には、黄色っていうか、白っていうか、その間みたいな微妙な色で、ぐるぐると長い髪をしている人と、黒くて、腰まで伸びてる長い髪の人が椅子に座ってて……

あつ！この人カチューシャさんと一緒にいた人だ。

「軽音部へようこそ！」

「歓迎いたしますわ〜！」まぶしい位の笑顔で言われる。

…い、言えない…「やっぱり辞めさせてください」なんて…

「とりあえず、お茶でもいかが？」

ぐるぐるの人が丁寧に言ってきた。

「いや、でも…」

「いいんですよ、気にしなくて」

私が曖昧に返事すると、気を遣われてしまった。

「いいから、いいから。座っちゃって」

カチューシャさんに興奮気味に言われる。

駄目だ…断れない…

コポポツと紅茶を淹れる時の独特の音が聞こえる。その音がピチヨンッという音と一緒に止まると、ぐるぐるの人がこっちにティーカップとケーキを差し出してきた。

「どうぞ」

「…」

「遠慮しないで」

「い、いただきます…」

私が黙っていると、また気を遣われてしまった。

「！おいしい…」

思わずそう口に出してしまっほど美味しかった。

辞めるの、止めようかな…「平沢さんはどんな音楽をやりたいの？」

「え？」

「どんなギタリストが好きかなあって」

い、言わなきゃ…「実はギターなんて弾けない」って。

「あ、あの、じっじっじっ…」

「ジミ・ヘンドリックス？」

私がどもっている、黒髪の人がいきなりこっちに身を乗り出してきた。

「いや、じっじっじっ…」

「ジミー・ペイジ!？」

「ちがつ、じっじっじっ…」

「ジェフ・ベックう!？」「あ、あう…」

『ジ』で始まるギタリストって多いの!？」

「そっか、ジェフ・ベックかあ…!」

「どなたですか？」

「『ロックギタリストには二種類しかない。ジェフ・ベックとジェフ・ベック以外だ』って言われてる、常に新しいサウンドを追求する挑戦的なギタリストなんだ」

「まあ…!」

「おおー!さすが平沢さん!」

「あは…あはは…」

話がどんどん大きくなっていつてる気がする。もう辞めるの無理かも…

「いやー、平沢さんみたいな強力な助っ人が来てくれてホント助かったよ」

「実は私達の部活廃部寸前なんだ」

ええ!??ってことは私が辞めたら廃部になっちゃうの!??

「平沢さん、ホントにありがとう!」

い、言わなきゃ!最悪のタイミングだけど!

「あ、あの、実は入部するの辞めさせてくださいって言いに来たんです!」

「へ?」

言った。ついに言っちゃった。

「ギターは弾けないし、もっと違う楽器をやるんだと思って…」

「じゃあ何なら弾けるの？」

「かつ、カスタ…ハーモニカ！」

ええ！？何言ってるの私！？ハーモニカなんてできないのに！

「あ、それならここに…」と言ってカチューシャさんが制服のポケットから本当にハーモニカを取り出した。

「じゃあ吹いてみ「ごめんなさい吹けません」

私はすぐに頭を下げた。

すると、みんな一瞬「へ？」っていう顔をしたけど、すぐに落ち込んだ顔をした。

その雰囲気になえられなくなって、私は音楽室を出て行こうとした。

「えと…それじゃあ…」

「待って！」

腕を掴まれた。

「ここに来たってことはさ、少なくとも音楽には興味あるってことだよな！？」「他に入りたい部活とかはあるの？」

「いえ、特には…」

確かに入りたい部活はないけど…

「ならば、せめて私達の演奏だけでも聴いてくれないか？」

「演奏してくれるの!？」

そついうわけで、三人に演奏を披露してもらうことになった。カチューシャさんがドラムで、黒髪の人がベースで、ぐるぐるの人がキーボード。他はみんな制服なのに、カチューシャさんだけなぜかジャージを着てた。

ドラムの人が、適当に色々な所を叩いてる。多分あれは音を確認してるんだと思う。でも、こういうのって、ちょっとしたコンサートみたいで、わくわくするなあ。

私はそれを椅子に座りながら、今か今かと待っている。

そして、三人が目を合わせて頷くと、カチューシャの人がすつ、と両腕を上げた。

「ワーン、ツー、スリー、フォー！」

演奏が始まった。

キーボードのメロディですぐにわかった。この曲は「翼をください」だ。

懐かしいなあ…卒業式の前はみんなで練習してたっけ。

でも、懐かしさより、『この軽音部の』演奏に聞き入ってしまった。あんまり上手くないんだけど、三人とも一生懸命で、楽しそうにそれぞれの楽器を弾いてる。その三つの音が、一つの曲を作り出してる。

そのことが、何だかとてもすごいことのように思えて、私はすっかりその演奏に夢中だった。

ドラムのタタツていう音がして、演奏は終わった。

それが合図みたいに、私は自然と拍手をした。そして、カチューシャさんが照れ臭そうに頭をかきながら、こっちに向かってきた。

「えへへ…どうだった？」「何て言うか、すごく言葉にしくいんだけど…」

「うんうん！」

「あんまり上手くないですね！」

私がそう言つと、カチューシャさんの目が点になっちゃった。

「でもすっごく楽しそうでした！私、この部に入部します！」

私がそう言つと、カチューシャさんは今度は黒髪の人のほっぺたをつねり出した。黒髪の人もカチューシャさんのほっぺたをつねり出した。

そして、

「やったー!!!」

と言つて、笑顔でカチューシャさんは黒髪の人に抱きついた。黒髪

の人も、遠慮気味だけど笑ってる。

「これからよろしく願いますね」

ぐるぐるの人も笑顔でそう言ってきた。

「あ、そういえば紹介がまだだったっけ。私は田井中律、よろしくな、平沢さん！」

「私は秋山澪。よろしくね、平沢さん」

「キーボード担当琴吹紬です。よろしく願いますね、平沢さん」

「あ、はい！こちらこそ！」

入る前は不安だったけど、この人達となら、とっても楽しくなりそう。軽音部に入ってよかった！

「でも、これで廃部を免れたわけじゃないですよ…」

琴吹さんがそう言うと、さっきまでみんな楽しそうだったのに、急に空気が重くなった気がした。

え！？っていうか私が入ったから廃部にはならないんじゃないの！？

「え！？軽音部廃部になっちゃうの！？」

私が驚いてそう言うと、秋山さんがそれに答えた。

「うん…実は部活って部員が5人いないと部として認められないんだよ」

よ、4人じゃなかったんだ…

そんな…せっかく軽音部に入部したのに…

でも、田井中さんがその空気を打ち破るようにこう言った。

「でもさ、まだ廃部と決まったわけじゃないんだし、諦めるのはまだ早くないか？」

それに続いて琴吹さんも言った。

「そうですね。まだ一週間ありますし…」

「でも、あと一週間で集まるかな…」

秋山さんは諦めかけているみたい。

そんな…このままじゃ…

軽音部が廃部になっちゃう！

第五話 秋山さん（前書き）

この投稿で、ストックが無くなりました。

他の先生方の更新頻度が物凄く高いので、恐れからそれを真似して
だけの小心者の蛮行に過ぎません。

今回は色々修正を加えました。他の先生方から幾つか貴重な指摘が
あり、自分としてはその指摘を活かした修正をしたつもりです。

内容は、主人公が遂に入部しますが、その過程です。題名の通り、
漣、というか主人公と漣の関わり合いに力を入れました。

しかし、漣がちよっとキャラ崩壊してるかもしれません。漣ファン
の方、ごめんなさい！

それでは、どうぞ。

第五話 秋山さん

4月も残り数日となった頃、俺は遂に軽音部に入部届を出した。山中先生によると、部室は音楽室らしい。今は挨拶をしに、音楽室まで向かっている。

軽音部ってどんな人がいるんだろう。ヤンキーとかいるんだろうか。あり得るかも。

まあそんなことを気にしてもしょうがない。

でも俺以外全員女子だったらどうしよう。明らかに浮いてしまう。そのことは、多分山中先生にでも聞けばわかるんだろうけど、聞かなかった。聞くのに何となく気が引けたし、それはさすがにないだろう、とか勝手に自己完結したからだ。

そんなことを考えているうちに、遂に音楽室に着いた。

人間は第一印象が大事。それさえよけりゃ、後はどうにかなる。うん、大丈夫！気合いを入れるために頬をピシッと叩いた後、ドアノブに手をかけた。

「失礼しまーす！」

俺が大きな声で言うと、パンツ！、とクラッカーのような音が聞こえた。

ていうか本当にクラッカーじゃないか？この音は。

…本当にクラッカーだった。それを持っているのは…女子ですか！！

「軽音部へようこそー！」

「ようこそ…」

「歓迎しますわー！」

「ようこそ！新垣君！」

み、みんな女子！！まさか、まさか…

うつそお！？ウソだろ！？いや、まさかすぎるよ、これ！どんだけまさかなんだよ！？こんなまさか体験したことないよ！！

…あれっ？

ていうか『新垣君』って、俺のこと知ってる人いるの？
しかも今の声は…

「これからよろしくね、新垣君！」

ひ、平沢さん！？け、軽音部だったんですか！？

「あ、ははははい、ここここちらこそ…」

噛みまくった。

ヤバい。とてつもなくヤバい。こんなにヤバいことが今まで一度でもあつただろうか。いや、ない。

周りに女子しかいない。

それだけのことなのに、恥ずかしくて顔を見れない。

俺は顔を真っ赤にしながら、それがばれないように俯くしかなかった。

「あ、お顔が真っ赤ですよ！大丈夫ですか！？」

「律、この人緊張しちゃってるぞ…！」

「よし、ムギ！お茶の準備だ！」

「はい！」

「さ、新垣君、座って座って」

平沢さんに急かされ、ぎこちない動きで椅子に座る。それに合わせて4人も座った。

俺はカチコチになりながら手を膝に置いていた。顔は下を向いたまま。さつきからドクツドクツ、って動悸がすごくて、オーバーヒートしそうなんだけど。

コポコポと何かを注ぐ音が聞こえる。多分俺をリラックスさせようと思って、紅茶でも淹れてるんだと思う。

ありがたいけど、申し訳ない。軽音部でお茶をごちそうになるなんて、滅多にないだろうから。

「さ、どうぞ」

『むぎ』と呼ばれた人がこっちにティーカップを差し出してきた。いつの間にかテーブルの上にはクッキーとかのお菓子もあった。

「あ、いただきます…」

断るほうが申し訳ないと思い、震える手でティーカップを握った。

「お、おいしい…」

一口その紅茶を飲むと、俺の口は自然とそんなことを言っていた。おいしい。紅茶は苦いからあんまり好きじゃなかったんだけど、これは甘くなってる。でも甘すぎるといっわけでもなくて、ちょうどいい感じ。

もしかして俺の好みを知ってるんじゃないかっていう位おいしかった。

「お菓子もおいしいんだよ」

平沢さんが甘い声で勧めてくれるので、クッキーもいただいた。

「甘い…」

勧められたものも甘かった。あんまりおいしいから、ちょっと高い店から買ったんじゃないかって思ってしまった。でも、1人の部員のためにそこまでしないだろう、多分。俺が黙っていると、誰かが言った。

「落ち着きました？」

見上げると、むぎさんがそう言っていた。

「ふえ！？まあ、はい…」

不意を突かれて間抜けな声を出してしまった。

「あゝ、まあ緊張するのも無理ないか。周りが皆女子だったら仕方ないよな」

見上げると、デコがやけに広い人がそう言っていた。

「あ、はい…」

お茶を飲んで少し緊張はほぐれていたけど、そう言うのが精一杯だった。

「おっと、自己紹介がまだだっけ。私は田井中律、ドラムスだ」

デコの人…ではなくて、田井中さんはそう言ってニカツと笑った。何というか、気さくな感じで、接しやすそうな人だ。この人なら、あまり意識しないですむかも。

「自分は新垣優人って言います」

俺は簡素な自己紹介をしてそれに返事した。

「キーボードを担当している琴吹紬です、よろしくお願いしますね」
そう言っつてむぎさん…じゃなくて、琴吹さんは柔らかく笑ってくれた。

その笑顔は、何というか、気品が漂っていて、何となく優しそうだなと思った。

でも、その笑顔は美しすぎて、俺は顔を赤らめてしまった。

「平沢唯です！担当はギターです！」

ピシッ、と挙手する時みたいに手を挙げて言う平沢さん。面識があるのに、なぜかまた自己紹介されてしまった。律儀な人なんだろうか。

「あ、ベース担当の秋山澪です。よ、よろしく…」

何やらボソボソと聞こえたので、その方を見ると、黒髪の女の子がいた。

でもその視線は定まってなくて、顔は何だか赤くなって、何だかソワソワしてる。

え？どういうこと？

何？俺もしかして怖がられてるの？

それとも気持ち悪がられてるの？

思わずまじまじとその顔を見つめてしまう。

：

：

「あ、ごめんな！こいつあんまり男と話したことないから緊張してるんだよ」

田井中さんが何か言ってるが聞こえない。

彼女に目を奪われていたからだ。

その、黒くて水のように透き通っている髪は腰まで伸びていて、目は若干つり目だった。

ものすごい美人だ。というか超絶美人だ。多分俺はこんな美人を今まで見たことがない。

そして、その顔はりんごみたいに赤くなっていて、もじもじしている。

その仕草がたまらなく可愛かった。

俺はぽかんと間抜けに口を開けていた。完全に虜になっていた。

その沈黙を破ったのは彼女だった。

「あ、あの…そんなに見ないで…」

恥ずかしい、と彼女は呟いた。

それを聞くと、俺は我に帰り、彼女の顔がまだ赤くなっているのに気付き、それに気付くと、ああ、向こうもこっちを意識してるんだ

と気付き、それに気付くとさっきまで彼女の顔を凝視していたことを思い出し、ボンツ！という音がしたんじゃないかという位、

一気に顔が熱くなった。

「あ、あう……」

俺はアヒルのように口をパクパクさせていた。

「お、おい！？顔めちゃくちゃ真つ赤だぞ！？ホントに大丈夫か！？」

「う、うう……ごめんなさい、ちょ、ちょっと……」

俺は耐え切れず、机に突っ伏した。

5分位してから、俺は顔をあげた。

その間、あうう、とか、あちゃあ……とか色々聞こえたけど、何かを話した人はいなかった。まあ、いきなりこんなことになっちゃ、何話したらいいかわかんないよな。

すっかり顔の熱も引いていたので、俺の声は弱々しくはならなかった。

「あの、いきなりごめんなさい。実はその、自分、女の子とあんまり話したことがなくて……それで、女の子と話すと、どうしても……」

情けないことだが、仕方ないので女性恐怖症を告白した。

「うーん……」

なぜか田井中さんが指を口に当てて考える姿勢をしている。どうしたんだろう。

「それならば、苦手同士一緒に克服しちゃえばいいんじゃない？」

名案とばかりに俺に言ってきた。
でも意味がわからない。

「え？苦手同士って俺と誰ですか？」

「漣だよ、秋山漣。こいつも男と話したことが少なくなっただから話す時に緊張するんだよ」

「あ、そうなんですか…」

さっき態度が変わったのはそのせいかな。
よかった。別に怖がられてたわけじゃないんだ…

「でも、ここは俺以外皆女子だし、俺は自然と慣れる、ていうか慣れないといけないと思います」

「…思ったんだけどさ、私とは普通に話せてないか？」

あ、言われてみれば確かに。

「あ、何か田井中さんとは、何ていうか、その、変に気を遣わないで済むというか…」

「……そりゃどういう意味だ？」

少し間を持たせてから、田井中さんは低い声で言ってきた。
やべっ勘違いさせちゃった。
俺は慌てて付け加える。

「いや、そういうわけじゃなくて、こう、親しみやすいというか、
そんな感じですよ。それに、自分も普通に話してる分にはそんなに緊
張しません。でも…」

と、俺はそこで区切る。

「予想外のこととか起きたりすると…」

歯切れの悪い言い方だったので、琴吹さんが聞いてきた。

「予想外のことって？」

「そ、それは…」

そう言いかけた俺は、さっきのことを思い出し、赤面した。

「あわわわ、また顔が真っ赤っかだよ！」

平沢さんが心配する声が聞こえる。

再び俺が俯いていると、田井中さんが言った。

「あー、何となくわかった気がする。普通に話してる時には問題な
いってことだろ？」

「…まあ、そうですね」

そう言つて、気持ちを落ち着かせるように、冷えきつた紅茶を飲み干す。

一息ついてから、こう切り出した。

「あのー、ところはずっと気になってたんですけど、皆さん新入生ですよ？リボンの色同じだし…部員って皆さんだけなんですか？他の先輩達は…？」

俺が誰に尋ねるわけでもなく言うと、田井中さんが答えてくれた。

「実は先輩達は去年皆卒業したらしくて、部員は私達だけらしいんだ」

「え？それって廃部の危機すらあるんじゃない…？」

それには琴吹さんが答えてくれた。

「校則では5人以上部員がいないと部活と認められないけど、新垣君が入ってくれたから廃部にはなりません」

そう言つて琴吹さんはニコツと笑つた。俺はその笑顔に少し顔を赤くしてしまう。

止めてくださいその笑顔。ときめいてしまいます。

……………っと、話を進めなきゃ。

「あの、ところで俺は何の楽器をやればいいんでしょう？」

「新垣君は何か楽器弾けるの？」

平沢さんが聞いてきた。

俺はギターが弾けるけど、さっき平沢さんも弾けるって言ってた。俺がもし「ギターです」とか言ったら平沢さんの立場は無くなりそうなんだけど。

言わない方がよさそうな…

「いいんだよ〜カスタネットとかでも」

平沢さんはそう言ってきた。

え？カスタネット？何でそんな単語が…

「それはお前だろ！」

田井中さんがそれに突っ込んだ。

へ？平沢さんカスタネット専門？

「え？でも平沢さん、さっき『ギター担当です』とか言ってますんでしたっけ？」

俺が疑問に思っただけで尋ねると、平沢さんは「えへへ…」とか言いながら目を逸らした。

か、可愛い…

「唯はカスタネットしかできないらしいんだ…ギターもこれから買う予定で…」

誰の声だろう？

声のした方を見ると、秋山さんだった。

え！？秋山さん！？

なぜかそれだけで一気に心拍数が上がった。

「あ、そ、そうなんですか。へえー」

焦っていたためか、わざとらしい口調になってしまった。

何やってんだ俺は。落ち着こう。

俺は咳払いをしてから言った。

「自分はギターが弾けます。中学の頃に始めました。でも、平沢さんもギターだから、ギターが2人いたら変ですよね…」

と俺が言うと、田井中さんがそれを否定した。

「そんなことないぞ。ていうかむしろ好都合じゃん。唯にギター教えてやってくれよ」

「ええ！？俺がですか！？そんな教える程の腕じゃ…」

俺が遠慮していると、平沢さんにごう言われた。

「お願いします！新垣師匠！」

「し、師匠お！？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

……いかにいかに。テンションがおかしい。平沢さんちょっとびびりしちやってるじゃん。落ち着こう、俺。

「私からもお願いできないかな…」

この声は秋山さん!?

「唯、コードもわからないらしくて…まるっきり素人らしいんだ。だから…」

そこで秋山さんは喋るのを止める。

いや、わかるだろ?その先は俺はわかってるはず。

俺はか弱い女の子の頼みを断るほど落ちぶれちゃいない。………多分。

などとフェミニストぶりながら、俺はその頼みを受け入れることにした。

「わかりました。できる範囲で頑張ります」

「本当?ありがとう!」

俺がそう言っていると、秋山さんは笑顔を浮かべ、軽く身を乗り出してきた。

………ってちょっと待ってください。そ、そんなに近寄られるとめっちゃ困るん…って近い!近いですって!!

や、やばい…

俺は

「あ、はい…」

と絞り出したような声で言い、顔を背けた。

すると、やはり向こうも赤くなって、

「じゅ、じゅめん…」

と呟いて俯いた。

「こりゃ話せるようになるだけでも時間かかりそうだな…」

「そ、そうですね…」

「あははは…」

俺達以外の3人が言う。

俺達は俯いたままそれを聞いていた。

第六話 まったりティータイム（前書き）

めちゃくちゃ書くのに時間がかかってしまいました。まだ唯はギタ
ーを購入しません。

早くそこまで進めたいのですが……

カットすべき部分というのがわからないため、まただらだらと文章
を書いてしまいました。

こんな小説でも、読んでいただければ幸いです。
それでは、どうぞ。

第六話 まったりティータイム

「きりーっ、れーい」

「ありがとうございましたー」

ふー、終わった終わった。これでやっと今日の授業が終わった。あー疲れた。数学の時間とかヤバかった。

眠らないように目を何とか開こうとしてただけど、それでも眠いもんは眠くて、あっちの世界とこっちの世界をさ迷っていた。ていうか数学ってつまんない。先生が何言ってるかわからないから、全然面白くない。

「はあ…」

俺が数学という苦痛に対してため息をついていると、突然声をかけられた。

「新垣君！一緒に部活行こ？」

「うおう！？」

まさか自分の名前が呼ばれるとは思わなくて、奇妙な声を出してしまった。

「ひ、平沢さん！？」

不意を突かれて、冷静にしゃべれない。

「そだよ？」

俺が驚いてその名を呼ぶと、当然のようにそう言ってきた。
…っというか実際それは当然だ。

「どうしたの？」

俺が黙っていると、平沢さんはひょいっ、と身を屈めてこっちを覗き込んできた。

あ、いい匂い…

っで、近い！近いです平沢さん！！い、息がか、かかりそう

……

だ、ダメだ！

俺は赤面したが、それがばれないようにごまかそうとした。

「そ、そですね、さっさと行っちゃいましょう！」

俺は早口でそう言つと、平沢さんを置いてけぼりにして、1人で教室を出て行くこととした。

「え！？ちよっと新垣君、待ってよ！」

後ろでパタパタと平沢さんが追いかけてくる音がする。

ごめん！平沢さん！

俺は顔を真っ赤にしながら、スタスタと教室を出た。

「待ってってばー！」

平沢さんの声が聞こえる。でも、振り返るわけにはいかない。赤面しているのがばれてしまう。

俺は心の中で謝罪しながらも、無視を決め込んだ。ただ、

「ふわっ!?!」

突然悲鳴が聞こえたかと思うと、ドタンツと鈍い音がした。

「平沢さん!?!」

俺はすぐ振り返った。

一瞬赤くなってるのがばれてしまふと思ったけど、それどころじゃない。

俺は走って平沢さんのもとに駆け寄った。

「あいたつたあ…!」

「だ、大丈夫ですか平沢さん!?!」

平沢さんはぺたんこ廊下に座りこんでいた。どうやら教室の入口のところで足を引っかけてしまったらしい。それを見ると、顔の熱が一気に下がった気がした。

「あ、うん、大丈夫だよ」

俺の問いに、頭を掻きながら平沢さんは答えた。

でも、そうは言ってもやっぱり心配だったので、重ねて尋ねた。

「け、ケガとかありませんか?」

「うん、本当に大丈夫だよ」

「そ、そうですね…」

よかった。全然大丈夫らしい。

……いや、よくない！

俺のせいで転んだんだから、謝らなきゃ！

「あの、平沢さん！ごめんなさい！」

俺は頭を下げた。

「へ？どうして謝るの？」

平沢さんは謝られた理由がわかってないらしい。

「いや、俺が1人で行ったせいで転ばせちゃったから…」

俺がそう言つと、平沢さんはぶんぶん手を振つてこつてきた。

「そんなのいいよ！私が勝手に転んだだけだから…」

「で、でも…」

と俺は食い下がる。

「いいんだよ。それより、早く部活に行こ！ね？」

平沢さんはそう言つて立ち上がった。

「あ、は、はい…」

俺はそう言っつて、平沢さんと一緒に部室まで行くことにした。
…ふうっ。よかった。最悪の事態は避けられた。

と思っっていた矢先に、

「でもどうしてさっきは1人で行こうとしたの？」

平沢さんが尋ねてはいけない質問をしてきた。

やばい。

やばいぞこれは。言い訳何も考えてない。

ここで、もし俺が黙っていたりしたら、平沢さんは俺に嫌われてい
ると勘違いするだろう。

そんなの絶対ダメだ！！

考える俺！何かいい言い訳はないか…

…

…

…いや、でもこれ以上黙っていると不審がられる。

…仕方ない。ちょっと言葉を濁して言うか。

「じ、実はその…恥ずかしくて…」

ボソボソと頭を掻きながら言う。これはわざとだ。

「恥ずかしくて？何が？」

平沢さんが聞いてきた。

「いや、女の子と一緒に、ってというのが…」

俺はわざと俯いた。

お願いします！これで思い出してください！

「え？女の子と一緒にだと何で恥ずかしいの？」

「ええええええええつ！！？ひ、平沢さん！！

俺昨日言ったじゃないですかぁ！！」

「あ、そういえば新垣君、女の子苦手なんだっただけ」

「う、はい……」

それを肯定するのは恥ずかしくて、少し言い淀んでしまつた。

「あ、もしかして、私迷惑になつてるかな！？」

平沢さんはあらぬことを言い出した。

「そんなことはありません！」

平沢さんが感じた申し訳なさを、俺はすぐに否定した。

「さっきは急に話しかけられてびっくりしただけです。今はもう大丈夫なので……」

行きましょう、と言って、俺は平沢さんと肩を並べて部室までに歩いて行った。

部室に行くまで、何故だか平沢さんはご機嫌のようだった。

いや、いつもこうかな？

「失礼しまーす…」

俺は部室のドアを開けると、小声で挨拶をした。

「ご〜んちには〜」

続いて平沢さんののんびりした声が聞こえた。部室の中には、俺達以外は皆もう来ていた。琴吹さんはティーカップにお茶を淹れていて……

…つて、え？あれ？

琴吹さんは鼻歌が聞こえてきそうなほど上機嫌でお茶を注いでるし、田井中さんは頬杖をつきながら、ケーキらしきものをフォークで突っついて、あーんっ、て大きく口を開けてるし、秋山さんは琴吹さんがお茶を注ぐ様子をじっ、と見つめてる。俺はその光景の意味するものがわからず、困惑しながら入口で立ち尽くしていた。

「え、えつと…」

そう呟く俺の横を、平沢さんは軽い足取りで通り過ぎ、こんなことを言い出した。

「ムギちゃん、今日のお菓子な〜に？」

え？『今日のお菓子』？

「今日はケーキよ、唯ちゃん」

いつものことのように、琴吹さんは慣れた口調で言った。

「おーっす、唯、新垣！」

田井中さんが挨拶してきた。

…右手にフォークを持ちながら。

「あ、新垣君、唯…」

秋山さんは、挨拶なのか独り言なのかよくわからない声で言った。

「あ、こ、こんにちは…」

俺は一応挨拶を返した。

…いやいや、これはどうということなんだこれは。何でこんなにまったりした雰囲気でお茶してるんだ。

まさか、昨日に引き続き、歓迎会第二弾とか？え？ってことは、俺めっちゃ歓迎されてる？

…いや、妄想だな、これは。

もしかして、休憩中？

いや、でも休憩にしては豪華すぎるだろ。え？何？『音楽の練習には糖分が必要です』、みたいな？

…わからない。もしかして本当に休憩？

俺が目の前の状況についてあれこれ考えを巡らせていると、琴吹さんが言ってきた。

「新垣君もどうぞ」

「え？」

何が『どうぞ』なのかわからなくて、俺は聞き返した。

「甘くてとってもおいしいよ」

平沢さんはケーキを食べていた。平沢さんは既に椅子に座っていて、頬を押さえながら「おいしい」と言っていてうっとりしてる。

…ケーキなんて、どこから出てくるんだ？部費？

いや、こういうのに使っちゃダメだろ。ここ軽音部だし。

皆遠慮なく食べちゃってるけどいいの？ここ軽音部だよな？

…

…いや、ここは皆に合わせるべきだ。変なこと言っただけ空気壊したらたらたまないし。

「あ、じゃあ…」

さりげなくそう言い、俺もお茶をいただくことにした。

椅子にすわると、机の上には既にイチゴのショートケーキと、ティーカップがあった。

いや、美味しそうなんですけどね。今も甘い香りが漂ってるし。

でも、昨日もお茶をごちそうしてもらったのに、今日もごちそうになるなんて、本当にいいのかな。

皿の上にきれいに乗せられたケーキを見ると、そう思わずにはいられなかった。

「あのー、昨日もごちそうになったのに、今日もこんなにしてもらっていいんでしょうか…」

俺がそう尋ねると、琴吹さんがそれに答えた。

「大丈夫ですよ、逆に余ってる位ですから」

「へえー」

そうか、余ってるのか。だったらいいや

へっ？

余ってる？どういこと？

「あの、余ってるって？」

「いつも色々な方から頂くけど、家に置いていても余らせてしまうので…」

ってことはこれ全部琴吹さんが持ってきたのか！？

お菓子もそうだけど、このティーセットとか滅茶苦茶高そうだし、部屋には食器棚まであるし、その中にはティーセットがずらーっと並んでる。

いや、これは女の子1人で運べるような物じゃない。ってことは、誰がティーセット類は持ってきたんだ？

「じゃあ、この食器棚とか、ティーセットとかは？」

「それも家から持って来ました」

さらりと琴吹さんはとんでもないことを言い出した。琴吹さんって何者…！？

俺がその底知れぬ謎に啞然としていたら、琴吹さんが話を戻した。

「ですから遠慮しなくて結構ですよ」

「は、はい…」

俺は、琴吹さんって結構お嬢様だったんだなあ、と感心し、ケーキを一口食べた。

あ、甘い…

俺がケーキの甘さに心を奪われていると、琴吹さんはいきなり話題を変えてきた。

「それより、唯ちゃんのギターはどうしましょう?」

「あ、そうだよ!ギターだよ、ギター!」

田井中さんが思い出したように突然言い出した。
お菓子のことで頭がいつぱいだっただのかな?

「ギ、ギターだよ、りっちゃん!」

平沢さんがおうむ返しするように言った。
何だ、この漫才みたいなの。

「唯、軽音部はお茶を飲む部活じゃないんだぞ」

秋山さんがあきれたように言う。

あの、失礼ですが、あなたも忘れていたのでは…

「ギターって、何円位するの?」

平沢さんが当然の疑問を投げかけた。

ギターって、安いのは一万位からあるけど、安すぎるのはよくないから、五万位でいいのかな?

……うーん……でも本当にそうなのかな。
よくわからない。

二十万位がいいんだとおもっただけど……
いい加減なことは言わないほうがいいな。

「安いのは一万円台からあるけど、安すぎるのはよくないからなあ
……最低でも五万円位はいると思う」

秋山さんが平沢さんに言う。

秋山さんってギターのこと詳しいな。

ベースなのに、すごい。

「ええ！？ギターってそんなにするの！？」

平沢さんがめっちゃめっちゃ驚いた。

一体何円位と置いていたんだろう。

俺が、わかるはずないそんなことを疑問に思っていると、田井中さ
んが平沢さんに聞いた。

「唯、お前お金大丈夫か？」

「今のお小遣いじゃ全然足りないよ……」

これはまずいな。高いやつを買ったほうがいいんだし。

ここは、「俺が貸しますよ」とか言ったほうがいいのかな？
いや、言わないほうがいいのかな……

「あ、でも親に頼めば何とかしてくれるかも」

俺が迷っていると、平沢さんが言った。

「じゃあ、今度の休みに皆で楽器屋に行こーぜ！」

田井中さんが元気よく声を張り上げる。

「あれ、ところで新垣君のギターは？」

平沢さんがいきなり空気を変えるようなことを言い出した。

「あつ」

持ってくるの忘れた。

「え！？まさか新垣ギター持ってないの！？ギター弾けるんだろ！？」

田井中さんが驚いて聞いてきた。

「いや、持ってます」

俺は冷静に答えた。

「じゃあ、何で今日は持ってきてないんだ？」

「い、いやあ、その………忘れました」

俺は、苦笑いしながら、頭を掻いた。
めっちゃめっちゃ恥ずかしい。

「わ、忘れたって……おい、大丈夫かよこれ……」

田井中さんに思いっきりあきれられた。

へ、へこむ……

「次からは持つてきます……」

そこでその日の部活は終了となった。

はあ……皆の印象悪くなったかも。こんなミスは減らさないと。

その日、家に帰った俺は、いつものように練習し終わってギターをギターケースに入れた後、部屋の隅に立て掛けることはせずに、ベツドの脇に置いておいた。

そして、次の日の朝。

俺は学校のバッグに加え、新たに、ギターケースを肩に担いで家を出た。

重かった。

いつも使ってるはずなのに。多分こうやって持つのは久しぶりだからだろう。

「すげえ……」

登校中、俺はそんなことを口にしていた。

自分が今ギターケースを担いで学校に向かっている。軽音部で皆と部活をするために。

俺はその事実に感動していた。

何ていうか、高校生だと思った。

まさしく青春だと思った。

「ふふっ……」

確かにギターケースは重かった。
でも、その重さがうれしくて。

俺の頬は緩み、自然と足取りも軽くなっていた。

学校に到着すると、教室に置くわけにもいかないの、部室に置くことにした。部室に到着して、俺が鼻歌を歌いながらドアを開けると、秋山さんが黒い大きな物体を壁に立て掛けているところだった。

「あ……」

目が合った。

し、しかも一人だし！！

ってことは二人きり！？

うわ、見てる、こっち見てるよ！！

やべ、何か言わなきゃ……

「こ、こんにちは？」

何故か疑問形になってしまった。

「お、おはよう……」

しまった！まだ朝じゃん！何やってんだ俺！？

「えと……ギターを置きに来たんですけど、いいですか……？？」

何故かそんな許可をいちいち求めてしまう。

「へー？い、いいよ……」

何故いちいちそんな許可をとるのかわからないからだろう、秋山さんは戸惑った口調で言った。

「あ、それじゃあ……」

「……」

き、気まずい。な、何か会話の種は……

……

あ、あつた！

「秋山さんもギタ、じゃなくて、ベースを置きに来たんですか？」

途中間違ったけど、俺は努めて明るい口調で話しかけた。

「うん……」

「へえー、そうなんですか」

「……」

……… 会話終了。

き、気まずい！

やばい、やばい、何か言わなきゃ何か言わなきゃ………そう、そう、だ！

「きよ、今日は良い天気ですね!？」

やべ、声が裏返った!!

「今日は曇りだよ……」

俺のあほおおおおおおおおおおおおおおお!!
だ、駄目だぁ!どうしても間が持たない!

俺は即ギターケースを立て掛けると、早口でまくし立てた。

「あ、じゃあ、俺はこれで!早くしないと遅れますよ!」

言い終わった瞬間に、小走りで音楽室から脱出した。

「はぁ……」

どうしてああなんだろ。もうちょっとちゃんと出来なかったかな。
ていうか、またいきなり逃げ出したし。うわー誤解されそう……

俺は頬杖をつきながらさっきのことを思い返していた。

秋山さんが男子が苦手っていうのもあるかもしれないけど、俺がもうちょっと話題を振れば、少しは打ち解けられたかもしれないのに。

「ふう……」

俺はこういう自分の性格が嫌いだ。

直らないもんかなあ……

「それじゃあ、ここを……新垣、答えなさい」

あ、そういえば放課後も部活で会うことになるのか。また気まずい雰囲気になるかも……

「おい、新垣」

いや、そこは皆いるから大丈夫、と思う。

……多分。

でも謝ったほうがいいのかな。

……

……初めっからこんなじゃ、先が見えてるな……

「新垣！」

「へい!？」

え!？な、何だ!？

「早く答えんか」

「へ？な、何がですか？」

俺が呑気にそう言うと、先生が怒った。

「16番の式を因数分解しろと言っているんだ!」

げっ!

今授業中!？

しかも、因数分解って……展開じゃないの!？

ていつか、これ六乗とかあるし！？
やべ、全然わからない……

「あの、わかりません……」

俺は頭を掻きながら答えた。

「高次の因数分解のやり方は教えたはずだ」

先生は無感情な声で言う。

「すみません、聞いてませんでした……」

俺がそう言った瞬間、教室からどっ、と笑い声が噴き出した。

「……もういい。授業が終わるまで立ってなさい」

俺は顔を赤くし、授業が終わるまで俯いたまま立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7797r/>

けいおん！ ヘタレ活動記

2011年4月6日13時17分発行